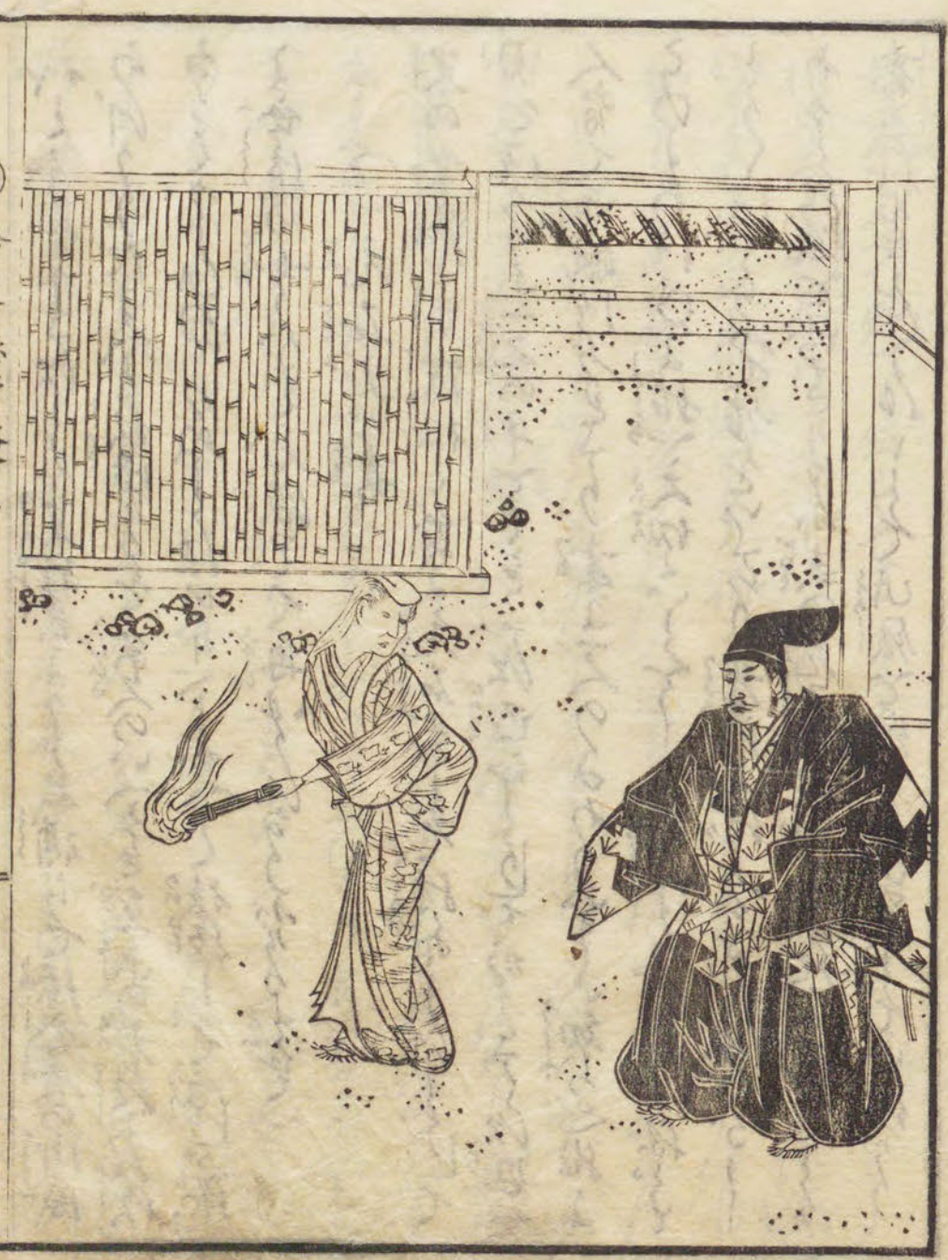


紙とりを下さるゝ是程云ふ迄も無き縁会度の御風
あげうたまへと私法りを京久のいへるを京の者ども扶
ゆるゝ心ひかれつゝたいかへやめて接拶して帰が涙
と世道の女りふと乃浪てて再ゆくりふりるぞ

○ 元石まが書

家の常例と東富村ゝ元石夫ゝ妹おまげゝして
田をたくふ一之の牛でもとゝ次已ゝ次母一
人育て兩服ばかりゝ妻ゝ二人のみわりへまき初ゝ之祝ゝ
このまわりゝ姑ゝ夫切ゝ
ゝくばらて姑をいたり者ゝ
あるゝ飯と炊ゝ元石夫ゝ
書ゝれをゝ

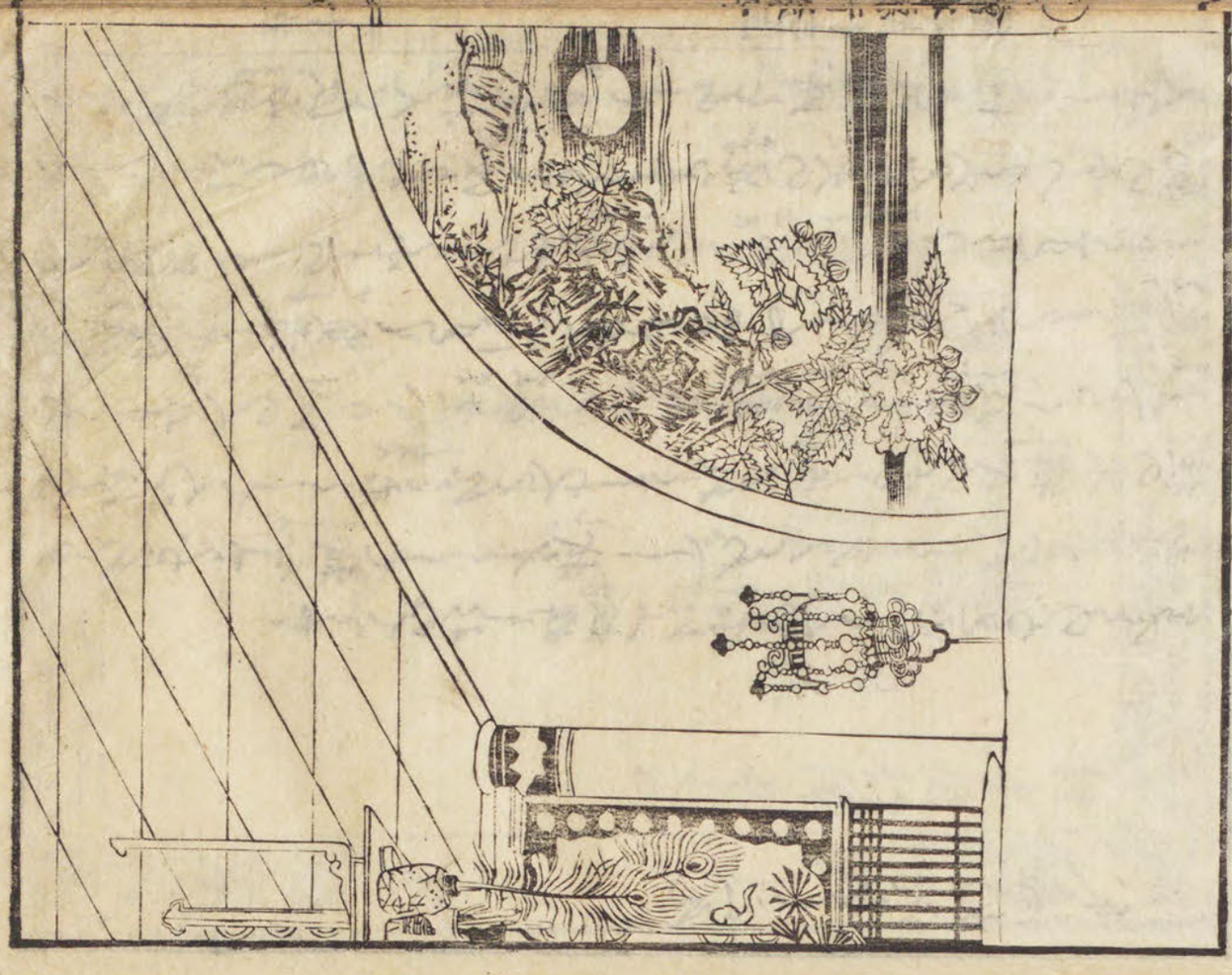


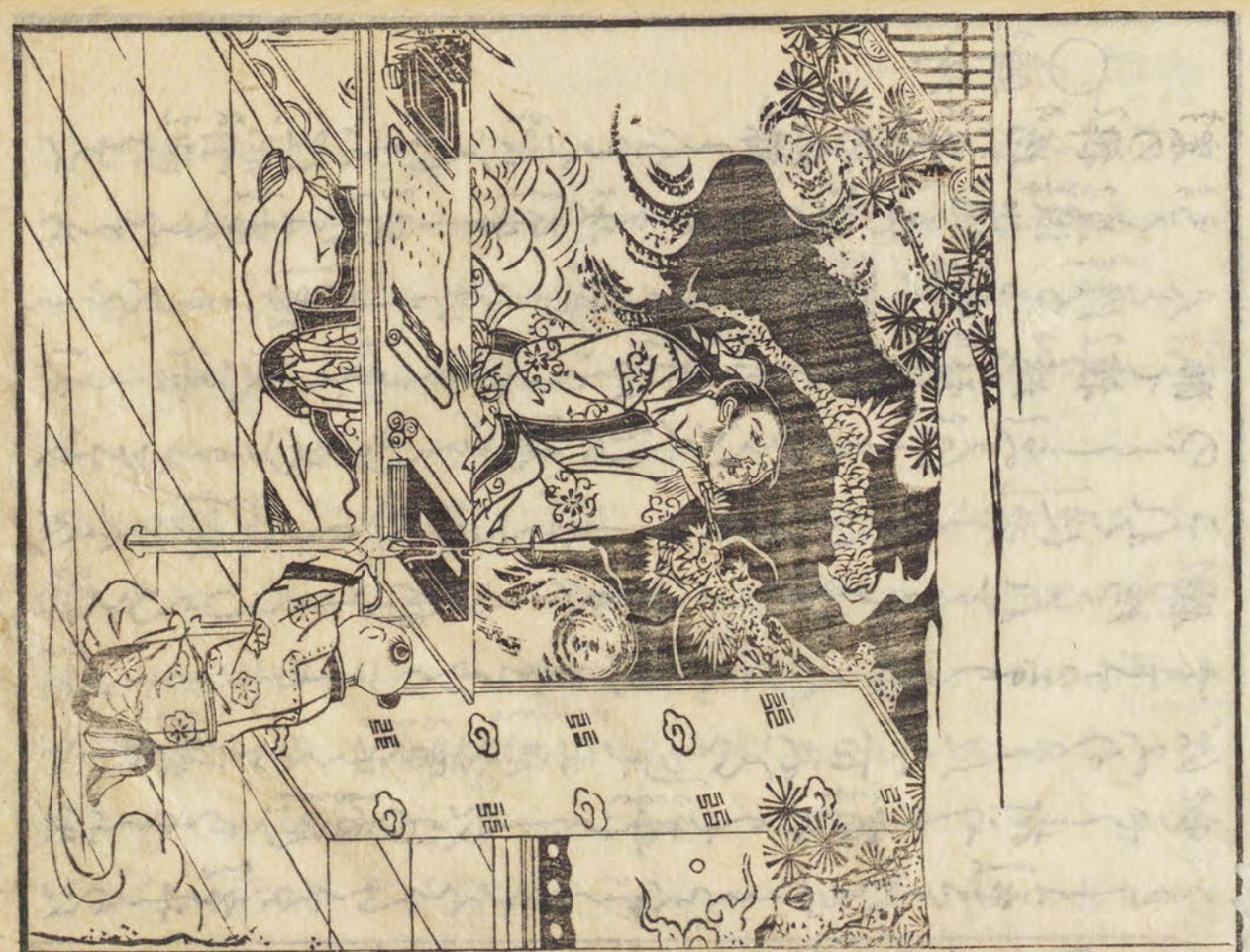
姑栄とゝて炊て飯とでよけゝ
ばゝんと飯茶をたゝ
ゝ小児の大小便とる桶
ゝりゝ宿ゝ
どゝ
ゝ炊ゝ
のゝと姑ゝ
ゝゝ
ゝ
ゝ

なる物の為にする者にたりぬべき
布のふ家よ糸こはれ入てるふうとうふ
まく姉よりてるもしの糸てさてつと布ぞうをさぐりるよ
衣服たちまちひけりてれ変りよくして夫よりせて
こ人うちうりてうを色るさよ法ありうてを糸とうり出
又れどとれとるどくうるてびよ稼りてれと夜ひ燈てうひ
くうふ和朝又れどりのどうく精の糸こはありうたく流
より涌出りりかて年てうて孫けるを遣て富て田畠数多物
うどりるさ海者しるうしが元なる夫婦死せ一日より年の出る
しとりるくりれ孫の出しるるてしりしが糸い出しうや
これ姉よ法るよ骨髄しる徴てもなよ考りとくせ色のな
年特いりりるふて

○ 韓琦

宋の韓琦い定氏の知縣しふて氏と法小埋北門断の夫へ
るく見温和淑実の性りあり依公事よ書をとてめ
人と傍るる音小燭をりてせて書るるば法らい燭とりるるく
眠て韓琦が難とれりり韓琦よりて清し文と書と元
のどしよりるくしいとびと外の者をとびて火とりてせり
これで逆者どもひげを焦せ一音を責ぬりて夫鄭とん次
韓琦これとをてゆるくるうどど祇ゆしくむりひて難
やきてるりさいるひよ文書と焦さげりしくするくと去
ばよりるれ金百あとりびて玉巵を買求るるば病して
もせ一折り一貫りて妻ちるれの玉巵どちるる小出
さるしよ音さげさてるるくしてるびけてる音ぬどられ





ふるしこけをハ韓坪をもつて色を拭んと次第笑ひていはく
物の中づくに人を天の定るごとく世ごろ人にもわるど
しかるをもりの功おほきのあるをもつてふたりまで死今を
天理しるべひろきや男女五人いづれも賢者にて清潔の
女へうく及第してうるはしのかを家業へりは世の人立りこの
桂の木韓氏の家に義をれしかをわかつれを表して人を化今
ものをのをもだいをやたはは人奴婢にはあてをや

繪本徳行誌巻之四

目録

國栖高邦　初丁
同虎壽丸　二丁
衛敦瑜妻　二丁
冀　欽　五丁
下道君首名　六丁
陳　蕃　六丁

曾子　七丁
王駿　八丁
房偃女　十丁
餘干　十二丁
茅澤屋集　十五丁
楊序

# 繪本德行談卷之四

## ○國栖高邦

吉野の國栖の氏人帶力先生兼大和守高邦は吉野郡
西郡に割據せり後醍醐天皇聖運衰くましまし
逆臣足利氏の為に敗北せり車駕吉野に入り給ふ高邦
神武の國ぶりに倣ひて君の正統なりと奉ずし女房並びに
子卿を客とせり吉野の武士を國栖と十六家の一族にして
中にも村上桃糸右家の紀軍に相連せり家を集め
九州四國より送りの次函使等ゝを糧米を備播の津にて人
を雇ひ官兵とたゝかひ敵方よりこれを海賊と云ふ実は
釣庭平二の忠臣なり八幡九郎義家ふたゝび奥州の後
しうや冰ゝ邦は南釣の股肱なり

○同虎秀丸

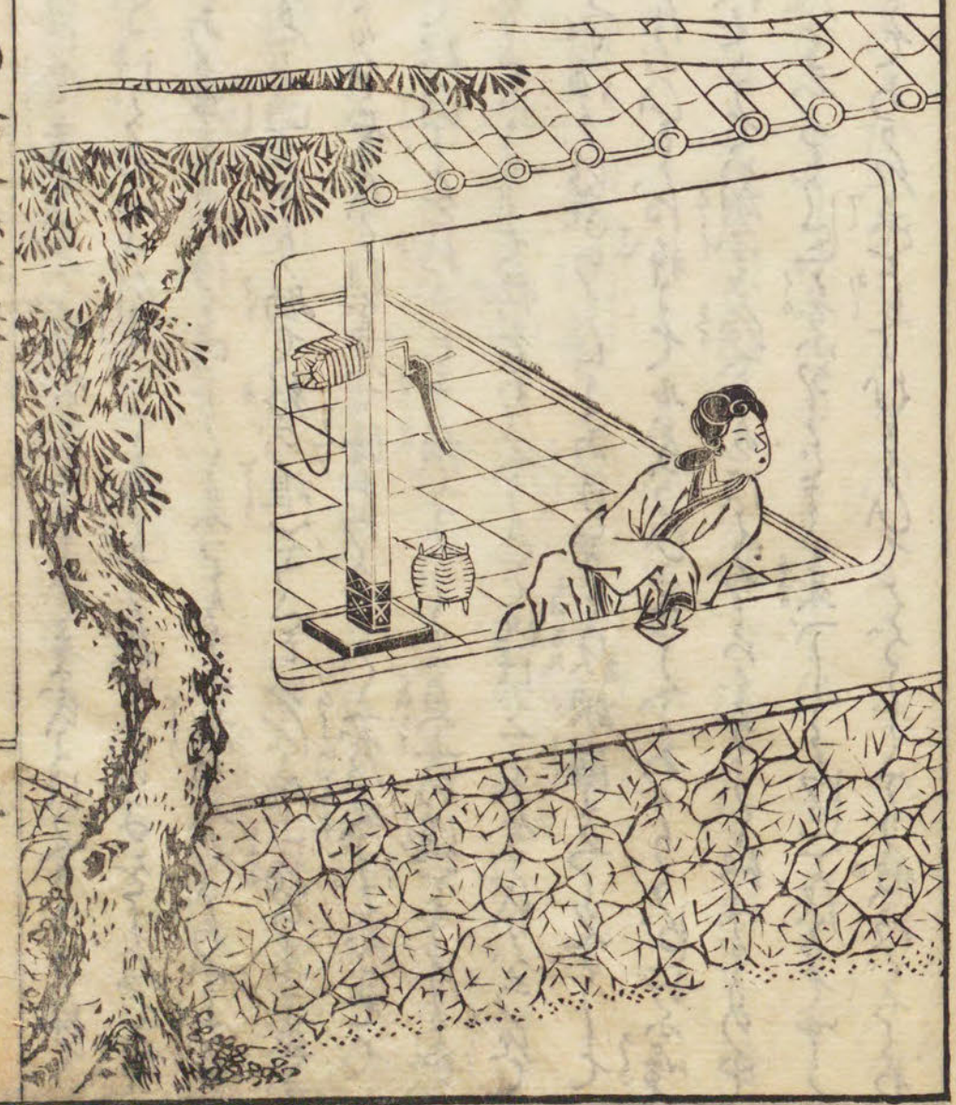
虎秀丸は周防の国の百姓の嫡男なりしが、幼時より経史をまなび、桃園の遺水の廣信に志ざして、京則よりいくさ馬と弓練と学ぶ。頗る智力あり、北畠の准后親房公の才藝を慕ひ、中納言のひとりの娘さうして若野の内官にたのみ、ふかくさらふして源の准后をうらぐの武士を集め的射とけいこ、さらに虎秀丸、楯を二枚たてまつれて射ぬいてまつ、まことにうり感賞のあまりにその物賞よ者に所を力をかし給ふ。

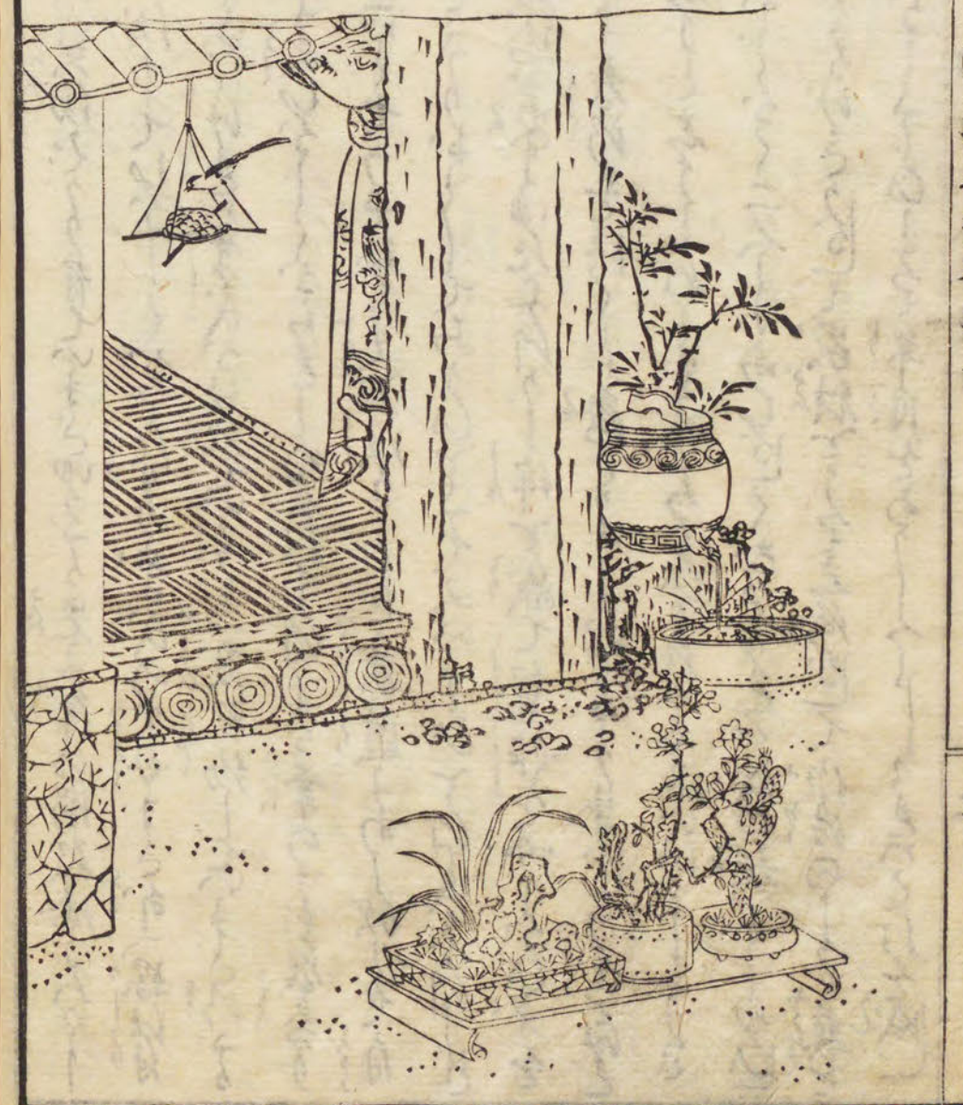
○衛敦瑜が妻

唐の衛敦瑜が妻は李氏の女なり。年十六にして敦瑜



と結婚ゆ。敦瑜ゆ病ゆえ、ひとりの弟の敦瑜ゆ人をつけ、李氏ゆ父母まさに嫁ぎ、一度契約したいまゆ、さて夫ゆ死して、李氏ゆ父母ゆ、さらに他ゆ嫁ぎ、ひとりの弟の敦瑜ゆ人をつけ





いづくんぞ
こゝろの後者も多くもなく李氏さほうくりうを
此家にはだあつて巣をつくり来つるに年毎に巣をつくり
りあるまさいはものどもく来つるふ雄八人のあるあらら
もりもとだ雌だりり栖て外の雄とうらつびて一羽のこゝ家ふ
ちゝゝを李氏こしを見て此をつがつく一度夫ゝふまて
らそて行ゝをおつびちを頼ふまどもし貞女の道てまりるみ
の有ゝこゝゝゝて雄をあつゝりとて此にてゝ李氏ふつ死て
ゝゝもゆゝ家のゝちゝありしゝ狀胡國ゝつゝゝて
いゝゝゆゝひゝゝ雄ゝて李氏ゝひゝのゝゝあゝりゝ巳げふ嘆
りゝ後ゝゝて胡ふゝ後ゝゝゝにゝゝゝふゝく外するあの中
ゝれゝゝゝゝゝ巳ゝゝゝ来ゝゝゝ巳ゝゝゝゝゝゝ
んゝゝあゝゝ家ゝ返ゝむゝゝゝゝゝゝ

二人ともに居りなどされもせず家を捨て親を捨て人くわうをうて月あるをうるを祈りしに佐藤氏ばかりなるを祈りしに佐藤氏とはなどあるとはなどいとゞ漢水のやうにうるわそぶるやうや

○糞紙

文五の臣田宮ゝ三人を召ふたり忠直卿度のたふつゝしめあるとて君の御使として奥ゝを受けて賢欲と去農夫耕作して居しにその素食物をとりさたり文五を見ようとおもひしに雅さらぬ賓をとりてなげゝ田宮ゝ文五ふるいに殺の德のかなうとよく敬とは者の德わて氏を治るに德とおもどとなまさりて臣民貧を安りてあり田文の食とりとうたるとうたりうと賓客を



養とうとうとうとして出者ありて若狭守べし若狭守べと出者とうとうとして氏と治るとうとうとうけとべ減ることを縣令とやはりとうとうとう

達てその德を謝せつるぶん

## ○陳蕃

後漢の時の人にて郭泰紀綱を矢ひ天下交り扶るこゝろ陳蕃
といへる人年いまだ十五才よりして大きなる志ありて潁川の
月を見ては耳をもうけど家内に英気のごとくなりもとゞし
終に掃除をせば学友の辞動を云ひの来りて汝いかゝこと
足ぐしくさとおくをとみ臣けるぞ濱よいどやへ人の為ならの為よ
懶婦おうとを人い妻の懈うぐふ貧をりもしいりんは汝惰ふして
威儀ぶしうぶ汚をを掃除せんとおもうべしとうべ陳蕃答
へていはく大丈夫の志もまたふ天下を掃ひ清むべしいかんぞ小家の
内ふうをんやうをけうをゆて学ふ人ををうりしがをして
終にはなをのごとく郭泰をもたうて光緑をもとして後一位のをる

よ昇りを郭泰あうげうをなりとや

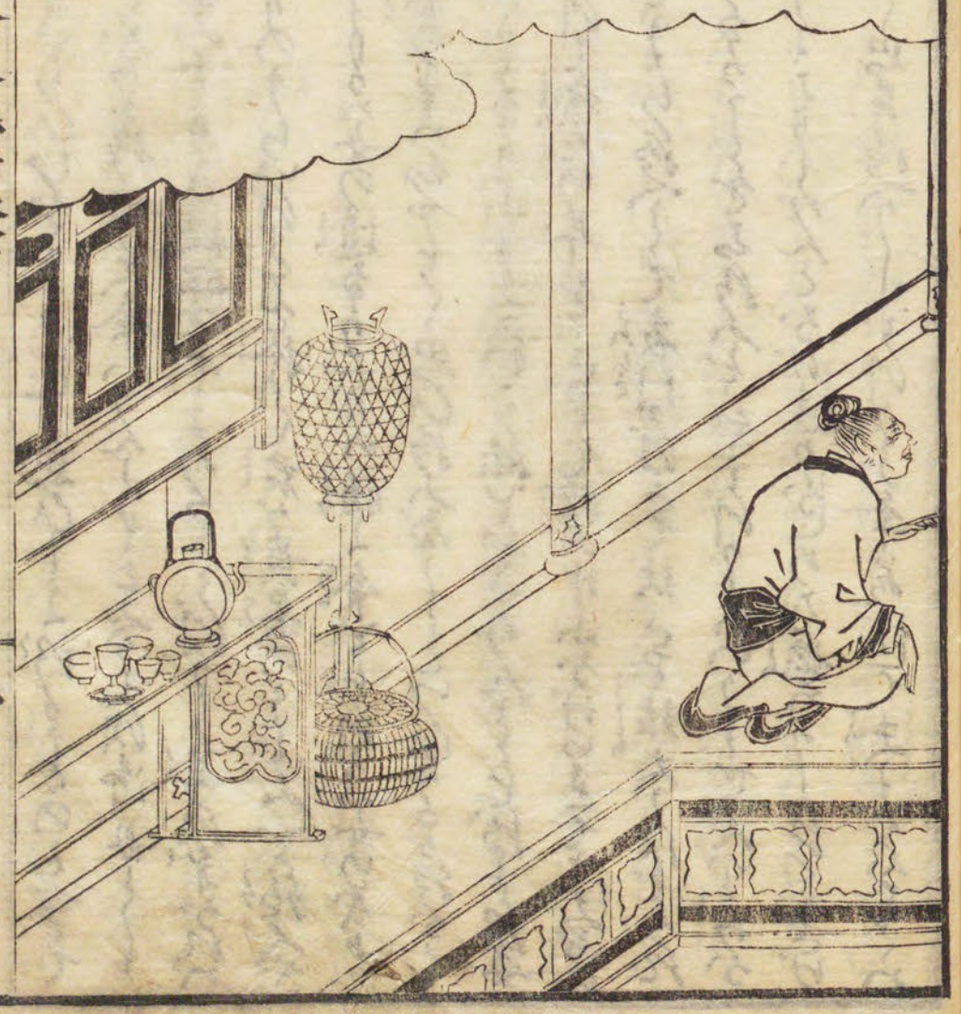
## ○曾子

大聖文宣王の御孫子曾子門道統を受傳て遺授せ
大賢者守りしが妻女いかくきしくたけれ人なりわるを曾
子その妻女を梨を焼うせらるをり半熟ふをけるを今一度
よく焼熟せをとかれらをとてをを渡せをを巳うをの妻を
をををををある人いつ妻女を離別しををを云の法のふる
らどやをとかれを曾子ををををををををををををををををを
数のうちはわしぶれども梨を焼へからどの半生のをふ数く
ものをををびをして大をるををををををををををををををを
ど夫の名をまでををんやををををををををををををををを
ををいの新作をを也妻女の脱り曾花元といへる巻物

よわりとけるが父ゝとしひさしく病人我汝の
母しゐひ孝行をほこりとべしゝゝ雪の日肯餐の事
京にまいりてこれを帝がこれをほめ給ふ後の后はとはふり
こゝろ孝己と敬しなひ周の尹吉甫にさしも賢相の父母し
人ぶかし後妻の讒言にまかせ長子伯奇を追遣しぬ今こゝ
よりこゝろ京の憲ゝ中ゝ吉甫が賢ゝ及ばいかゝしゝ人ゝ
後妻ごひゝゝゝ

晉武帝圓夙





○ 俳子

庵の梅子とうとうしのびかねて四月廿日に出立

鶯の鳴音十遍聞ぬ時

鶯の鳴音聞ぬ時

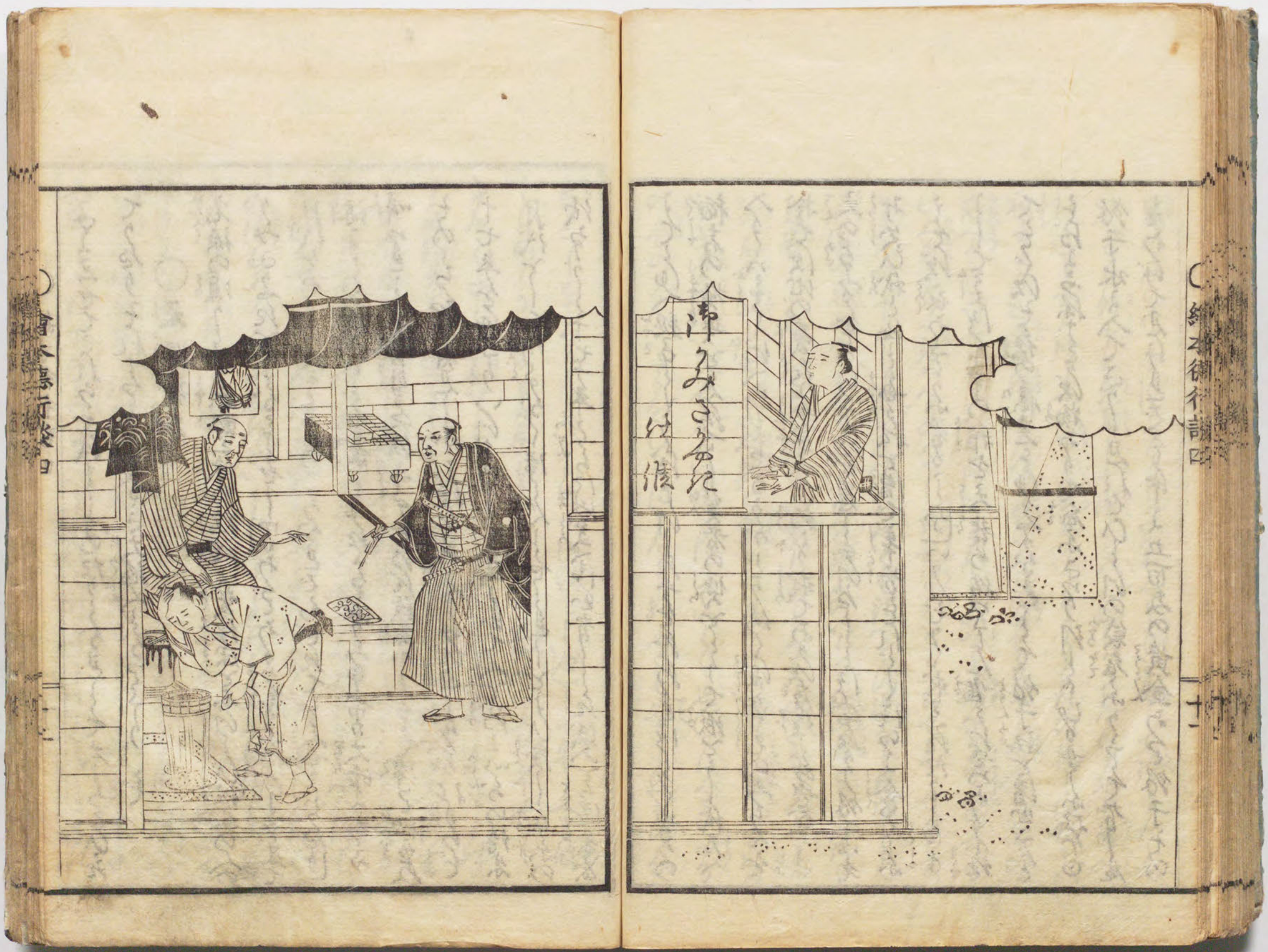
鶯の鳴音聞ぬ時

鶯の鳴音

竈の灰の中よりしてすりこぎ一本をぬきとりて家へ
入るとく紙千を発奮して燈を入れほしがるを見て延小商人
はすこしもうたがはずふの中より袋入ふくろとなげ捨て紙千
枚のうち灰の中よりなげ出すを見て袋をかれ平ゆかうとの
商人をわるものとおもひ袋をとりかへしさてはかどふ平へ稼ぐる西道のくるる
山大臣さらふ幾りんのるしに黄金ばかりとうらてあるせんとて
りとべ紙千さらふ金ばかりとべ一両をもしばらくの間ねたりしに
天道の思わるるとうらをしりて商人のいとく紙千金をとりかへ
自宅へとびさるとしばらくの間ねたるなりざるとうべさり
いのちの紙しをまた大臣と崇るわりがさとよと礼をいはせて
まふふ法者をとりて大よりてい〳〵思ひがけなきふるの
の金のふくろ入をもしばらくたりしに紙千私ものを



しそうしてもうしに紙千をもうしなはんとせしに世の
極楽の境界を見るとおもひ長者の供をしてうて浪とう紙千
入るとく〳〵紙千出ずとうらかどう紙千竈元のすりこぎを
捨て灰の憂紙千食事をもとめ紙千求てあるべきとうらをしり
天のうらをしらずとうべ愚しきとおもひ紙千実
おそひ紙千と仕しあるれと漕で幸ひとれしにて食べふ
うそ灰衣わるとうふ者ることいんどう求てたりうの白ふ
してうとうべく半の邪を天咎ち結ぶごん准うれ芸いあるふ社
てとうべ灰の庫芸をしりうまとして紙千私と漕出さんを
とうふ孫うべ灰物ありて座ふさりれしとうしるせしふれ
紙千水へ入てさぶ一月れどひとりの袋座ふうとて有
ふわげて月けりとでうを中へ五百文の黄金ありて紙千もの


御うみさうの儀
仕候

[illegible]

○米澤屋表

元禄の頃[illegible]

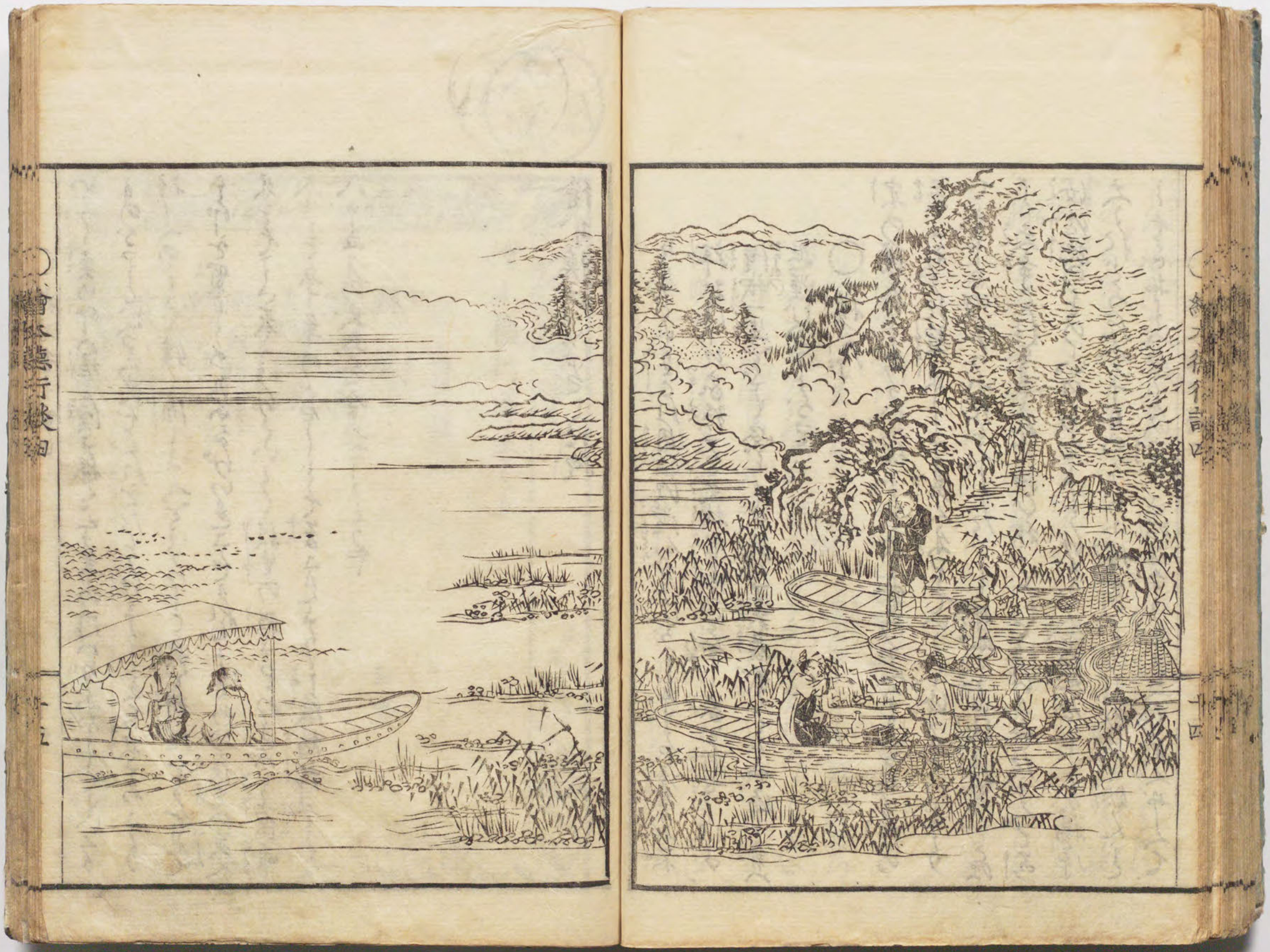
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



いくゝ矣の卯の塩し賣子孫こゝ千年の内いりふかしてさいゝる
ものゝこゝいつゝゝ多んぞこれをたゝちけざるこゝ也て養ふ事
ゝ〳〵のごとく漬し浦しゝ人どもうりこゝ矣と新煙七ゝを見て
ゝ卯を買りゝ物ふるげつゝ三七五九れど十日めの夜丑の美人
来りてゝ養ゝ給へ給へくいゝゝく殺生の殺ゝ物ゝ見ざゝ者の命
今ゝゝ五十年のゝだしゝゝて養ゝ養ゝゝ後楊柳ゝゝよ
八十五才の矣年を今ゝ世しゝうや

繪本徳行譚巻之五

月孫

魏徵　初丁
樊姫衛姫　口
上野朝村　二丁
開封新婦　尺丁
歐陽永叔母乙　六丁
宋就　七丁

大和節婦　八丁
鄭義宗妻　九丁
賢直言妻　十丁
范巨卿張元伯　同
文安農氏　十一丁
姜維　十三丁
徹書記　十四丁


繪本德行談卷之五

## ○魏徵

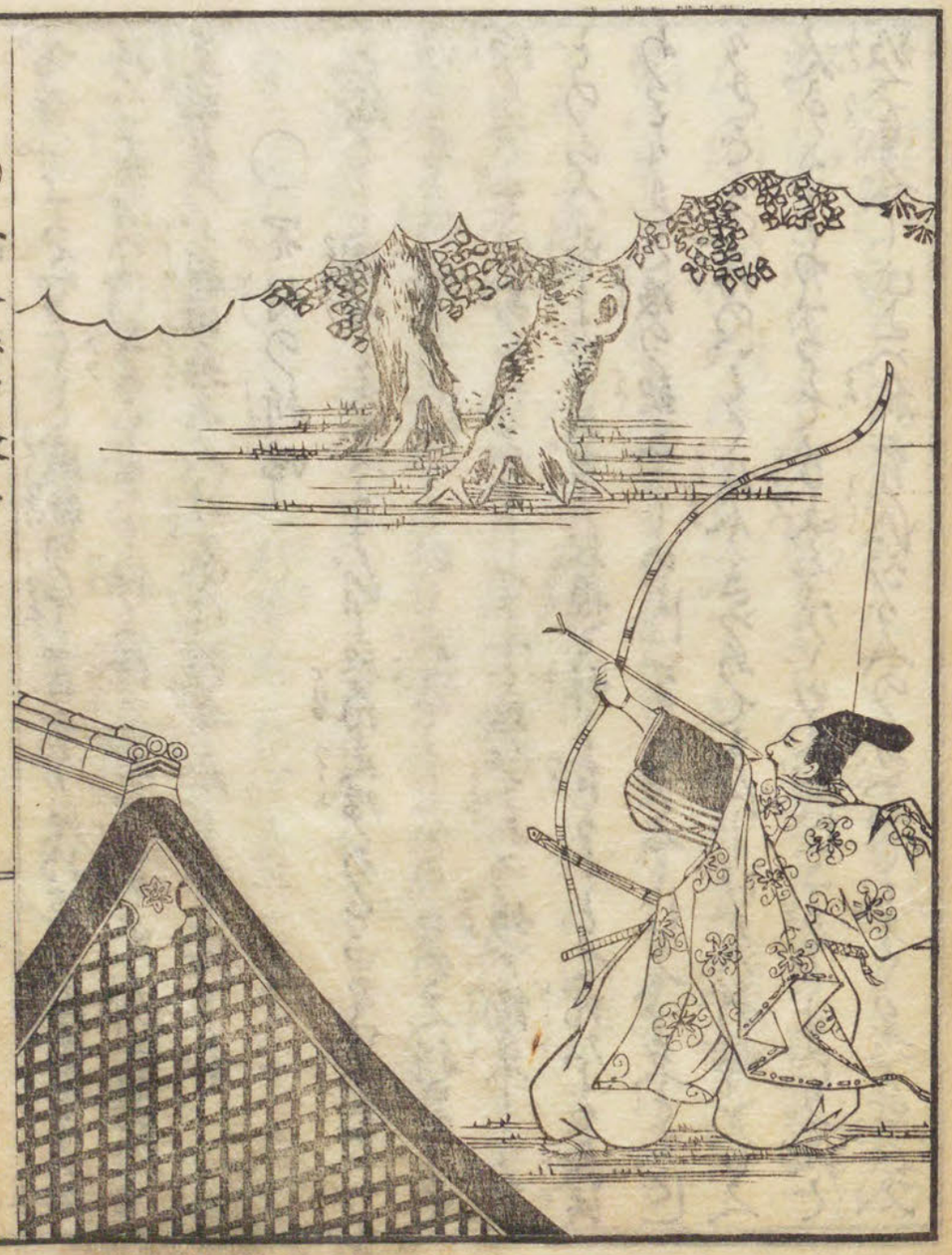
初唐の良臣兼相魏徵は鉅鹿の人なり。幼にして孤となり、貧困にして行ふ所なし。武德の末、太子建成と齊王元吉とあらそひ、徵、建成に勸めて、早く元吉を除くべしといふ。建成、用ひず。建成、誅せらるるに及び、徵、捕へられて、太宗の前に出でしに、太宗、徵が才を愛して、その罪を問はず、諫議大夫に任じ、ことごとく、その言を聽き、天下大いに治まり、國家、民、ともに、ゆたかなり。帝、かつて、徵に、問ふ、「人主の道、如何ぞ、明なるを得て、暗なるを失はんや。」徵、答へて、「人主、聰を廣くして、一人の言に、惑はざるを、明といふ。人主、偏信して、臣下の、ほしいままなるを、暗といふ。堯舜は、四方の、目を、明らかにして、四海の、耳を、聰くす。故に、聖、無ふ。秦の二世は、趙高に、惑はされ、梁の武は、朱异に、惑はされ、隋の煬は、宇文化及に、惑はされ、みな、人主の、偏信

御衣の袖をまぐらせゆへとゝ卒しく侍ほど
まぢこれりしかるに半のわりごさよ

○ 樊姫 衛姫

楚の荘王いとゝ猟をこのみ改て行ひとゝ
給ひの夫人樊姫しるへ人とゝ奥をを食せらるゝことなし
荘王ものゝ猟をとゝ猟をこのみ改て行ひとゝ
このゝ給へゝ志ゝとゝ給へゝ又神の桓云い音楽を
いろ〳〵けもとゝ桓云の寵妃衛姫しる人ゝ音楽のをこしひ
志ゝけりもとゝ桓云ゝ樂をゆ給へゝ楚じて
ゆゝ給へゝ給へゝ桓云ゝ加ゆゝのゝ心ゝ給へゝ

○ 上野 新村

上野十郎義宗新村いわ軍頼経云の御法して新復に年上

二條ゝ右大臣良実云の等に仕じ給ひ新蔵二條度の幼長猶王
云ゝ〳〵ゝ軍家の法に枝ゝ〳〵ゝ小ゝ籠ゝ〳〵ゝて
庭樹の梢ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵